

2005.09.01

ストリート

ダンスについて卒論を書くという学生が研究室を訪ねてきた。

「ヨーロッパ発祥のバレエは緊張系のダンス、アフリカ系アメリカ人発祥のヒップホップは脱力系のダンス」という、乱暴な括りではあるが興味深い話を、身振り手振りを交えて語ってくれた。

その身振り手振りは、巷間「古武術系」と呼ばれる、体幹部の筋肉や関節をできるだけ独立させて動かす動作を連想させた。ヒップホップ的な動作を獲得するためのレッスンは「アイソレーション（孤立）」と呼ばれるそうだが、「孤立」の趣旨はまさに、甲野善紀氏の言う「身体を割って使う」そのものである。

ここまで考えて思い当たった。近代スポーツの中で、「古武術系」の動きを採り入れて最初に成功したのがバスケットボールだったのはなぜか。マイケル・ジョーダンをはじめ、アフリカ系プレイヤーの独壇場であるバスケットは、元々脱力やアイソレーションと類似の身体技法が潜在していた領域ではないのか。ヒップホップ的な脱力やアイソレーションを身体化したトッププレイヤーの動きを、たとえビデオであっても目にしていたバスケットプレイヤーたちは、知らず知らずのうちに、「身体を割って使う」古武術の見取り稽古をしていたのではないか。

元バスケットプレイヤーの、うちのかみさんにこの話を聞かせたらこう言った。

「なるほど、ストリートつながりね」

うまい。

御礼の代わりにアイデアを一つ。

「緊張系 - 脱力系」に代えて「四肢系 - 体幹系」という表現は使えませんか？

体幹部をトルソのように固定して、四肢を動かすことで表現するバレエと、脊椎、肋骨、肩胛骨などをずらしたりゆがめたり回したりすることで、体幹部をより積極的に使って表現するヒップホップ。この観点でいくと、ラジオ体操なんか間違いなく「四肢系」ですね。

使えるようなら使ってください。

石原都知事の肝いりであることが気に入らないせいか、ほとんどのマスコミは黙殺しているが、現在東京では大規模なストリートダンスイベント、「大江戸舞祭」が開催されている。小中学生を主要メンバーとするダンスチーム（連）が都内各所の路上で踊る。

ストリートダンスつながりで、ちょっと注目していたのだが、手に入るわずかな写真で判断する限り、彼らの踊りは「四肢系」である。背筋を伸ばし、胸をはって、顔を上げてポーズを決めている。無理もない。指導者のほとんどが「四肢系」ダンスの経験者にして「体幹系」ダンスの未経験者であるはずだから。四肢系ダンスでは固定しておかなければいけないはずの体幹部を動かすことへの違和感は、おそらく学校教育の場では「下品」とか「子供らしくない」とかという言葉で表現されているだろうということも容易に想像がつく。路上で踊りさえすれば体幹系の動きが普及するわけではないのだ。

むしろ、「古武術系」と呼ばれる新手のバスケットボールのほうに、体幹系ダンスへの早道を見てしまうのは、武道家の端くれとしてのひいき目だろうか。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.09.01 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.08.14

## 意味へと急ぐダンス

第18回全日本高校大学ダンスフェスティバルをNHK教育テレビにて偶見。番組タイトルだけ見て競技ダンス（いわゆる社交ダンス）かと思ったのだが、実際はいわゆる「創作ダンス」である。自作も含めて、あらかじめ創られた物語をダンスで表現する。主題がすぐれた作品には、大賞（文部科学大臣賞）とは別に賞（NHK賞）が出る。所作が特別に美しかったり関節使いが見事だったりするチームに賞が出たのかどうかは、途中から見たので残念ながらわからない。しかし、発表順からいってNHK賞こそが大賞に次ぐ重要な賞である。

中井孝章氏が黙読や速読を「意味へと急ぐ読み」と呼んでいる顚りに倣えば、これは「意味へと急ぐダンス」である。ダンサーの身体は、物語を伝達するメディアとしてののみ意味を持つ。そのせいだろう、大賞受賞チームよりも身体の利くチームはいくつもあるように見えた。

であるからこそ、とってよいだろう。解説者が振付や衣装の意味をやたら説明する。「茶色は現代ではファシズムの象徴で」だの「あのマスクは心が壊れた母親の象徴で」だの。ああうるさい、黙って見せろ。専門家だからってダンスの意味を独占する権利はあんたにはないぞ。第一、あんたはダンスの専門家であって物語の専門家じゃない。アナウンサーも調子に乗って「一人一人が問題意識を持って踊っているのがわかりますね」などという。それにしても、マスクをつけて無表情を表現するってのはどうなんだ？ 仮面劇の伝統を思い切り覆している斬新さはあるのかもしれないが、ダンサー達も指導者も審査員も、本物の無表情を見たことがないんじゃないのか、などと、ついこの間「ザ・無表情」を見たばかりの私は思ってしまう。

その一方で、「身体のふれあいが少なくなっている現代だからこそダンスが重要」なのだとも言う。「我が子を愛しているのか虐待しているのかわからなくなっている病んだ母親」だとかなんだとか、そんな陳腐なフレーズを伝えるための入れ物におとしめられた身体で触れ合ってたって、言葉以外の何が伝わるものですか。

思えば、中学の文化祭で体操部のダンスを見て以来、私にとってダンスとは長く創作ダンスのことだった。しかしその創作ダンスの中で、最も印象に残っている演目を踊ったダンサーは、十年を経てその舞台をこう振り返った。「あのときは、壊れようとしていた」と。ことほどさように、意味を伝えるダンスではなく、意味を離れようとするダンスの方が感動的なこともある。

幸か不幸か、現在私の周辺にいるダンサー的な人々は、「意味へと急ぐダンス」から遠い位置にいるように見える。それは「意味へと急ぐ」ことを業とする学校教育に携わるには生きにくいことだろう。しかし彼らにこそ、学校教育からちょっとだけでも意味を引っぱがし、本当に「身体と身体の触れ合い」の場を開く可能性がある。私一人だけでも、そう信じて彼らを見守りたいと思う。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.08.14 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.08.11

## 喝！ への道は遠い

吊革につかまった左腕に、ビニール製のトートバッグの角をガツンとあてられたときから、「イヤなおい」はしていた。黄色だかオレンジだかのシャツを着た、性別不明のこわばった横顔。

同時に二つ空いた座席のうちの、一つの正面に立っていた私がそこに座ったら、私の前を横切って私の左隣に座った。その席の前に立っていた乗客を出し抜いて、だ。女性だった。

座ってすぐに足を組み、間もなく携帯電話をいじり始める。そのうち彼女の左隣をしき

りに気にし始める。

そして突然の金切り声。「よりかかんじゃねえよ！　ずっとよりかかんじゃねえよ！！

自分じゃ気づいてねえだろうけどな！！　隙間があったらもっとよれってんだよ！

！！！」とまあ、そんな感じ。左隣の年配の女性が、居眠りしたはずみに彼女の肩に触れたか何かしたらしい。それにしても「ずっと」とは何だ？

傍目に見たら何一つ落ち度はないのに、剣幕に押されたか「ごめんなさい」を連発する怒鳴られた女性。あまり気の毒なので「しずかにしてくれねえか」と一言。収まる気配さらになし。「だまれ」ともう一押し。いずれも顔を近づけて押し殺しめの声で。「うるさい！」と今度はこっちに金切り声。ひとまずお年寄りへのこれ以上の狼藉は回避したものの、この後の展開をいくつか想定してひとしきり緊迫。幸い何事もなくお互いに下車。

「雷のような声を出せば、人は思わず今やっていることをやめる」「雷のような声を出す人は実在する。禅宗の老師の喝！　がそれだ」「天突き発声は喝！　への長い道のりの確実な一歩だ」と講義のたびに語って2年。喝！　への道は遠い遠い。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.08.11 | 固定リンク | コメント (2) | トラックバック (0)

2005.07.22

天突き発声の原点

何度か書いているはずだが、ワークショップの準備体操として「天突き発声」を恒例にしている。映画「七人の侍」で、侍たちが"百姓"に闘いの声を上げさせる時の仕草を参考にしたものだ。

膝屈伸（ハーフスクワット）と肘屈伸を同時に行いながら「エーイ」と声を出す。胸椎の緊張をとり、膝の力を抜いて体幹部を落下させながら深く呼吸する。慣れてくると立っているときの重心の調整もできるようになる。

深夜、オリンピックメダリストが指南する「上手な平泳ぎ」を見ていて気がついた。あの膝と肘の屈伸は、平泳ぎそのものだ。大学の体育の授業でたたき込まれた、そして小学校の水泳指導のアルバイトで小学生にたたき込んだ、「正しい平泳ぎ」の動きに酷似している。

そういえば、最初に「呼吸を意識しろ」と言われたのは座禅会だったが、本当に最初に呼吸を意識したのは水泳の息継ぎだった。子供のころから20代前半までは、毎年欠かさずどこかに泳ぎに行っていたものだが、その蓄積は、泳がなくなって久しい今のワークショップにいくらかは反映されているのだろうか。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.07.22 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.06.24

負うた子に「劇的日常」を教えられ

昔、「劇的日常」という言葉を多用していたことがある。「平凡な日常も、見方一つで劇的な出来事にあふれている」というほどの意味。私の造語である。

都会の小学校のアンツーカーの校庭で自然とふれあう研究授業を参観して、久々にその言葉を思い出した。

授業者は、一年前に「あなたは半歩早い。野球で言うと前進してショートバウンドにしてしまうタイプ」などと指摘したことがある学生。今日も児童の前に立つ姿は思い切り前がかり。きっかけさえあれば歩み出して子どもに触れてしまいそうな躍動感のある立ち姿。

「半歩早い」感はない。子どものオファーを受けて、返す。しかもギリギリまで引く。張る。「エイエイオ声が小さいからやりなおし～！」って、ふつうは「エイエイ」でさえざるものだろう。赤ん坊も一年経てば一つ？　いやいや、これも修練の賜物。それにして

も腕の印象がほとんどない。ないからには体側にだらりとさせていたのだろうか。たかが腕と言うなかれ。腕一つで場が和んだり引き締まったりする。終始手を動かし、上体を揺らしながら講義する私にはうらやましい身体技法。

これを見逃した奴はかわいそうだなあ、これを悪く言う奴は気の毒だなあ、と思ったのが、全員に合い言葉を確認したシーン。グループごとに違う合い言葉を絶叫したので何を言っているか聞き取れない。慌てず騒がず「はあい、一個もわからなかったけどたぶん合ってるでしょう」だって。大好き、こういうの。思わず「おまえは！」って叫んじゃったもの。将来きっとあなたのそういうやり方を悪く言う人が現れる。でも請け合う。長い目で見ればあなたの方が正しい。

活動は「フィールドビンゴ（教材名ネイチャービンゴ）」。碁盤目状のマス目に書かれた動植物を探してビンゴを完成させるもの。

「ふわふわしたもの」「いきもののなきごえ」「いいにおい」など、触覚・聴覚・嗅覚に訴えるお題も心憎いが、金曜午後のお疲れ気味の児童が俄然食いついたのが「はっぱにべったんこ」。粘着テープで葉脈を写し取るのが課題だが、その作業をいかにも楽しそうに、動作や擬音を交えて再現してみせる。諸注意の後一斉に校庭に飛び出す子どもたち。こうなればしめたものである。

分散して動植物を探している子どもたちの間を巡回して何かアドバイスしているN先生。MじゃなくてN。ギヴンネームの方。校庭を闊歩して子どもたちのグループに近づき、子どもの肩甲骨の間に掌をあてて、一緒に何かを見やりながら言葉をかけている。そうそう、肩甲骨の間って、いちばん無難にボディタッチできる場所だよね。その姿はちょっと、「メトロポリス」でブリギッテ・ヘルムが演じた「マリア」のようでさえある。ロボットでなく生身のマリアの「ごらんなさい、あの人たちも兄弟なのよ」のシーン。古い。それに、今まで「ブリギッテ・ヘルムに似ている」と言われて喜んだ人はいない。きっと喜んでくれないだろう。それ以前に、何を言われているかわからないだろう。まあいいや。今年の研究授業は大収穫だったなあ。「神様が学生の姿で舞い降りた」みたいだったなあ。感謝感謝。

後日、N先生が日舞十年のキャリアをお持ちだということが判明した。なるほど、それで「劇的な立ち姿、歩く姿」にも納得。ブリギッテ・ヘルムが束になってかかってもかなう相手ではなかった。

気がつくところにもダンサーがいた、ということにもちょっと驚いていたりする。当研究室のダンサー率、おそらく平均をはるかに超えている。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.06.24 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.06.23

ゆっくり歩けばぶれない、とまで言い切つてよいかはともかく。

教育実習生の研究授業での出来事。

昨年、基礎実習中にたまたま廊下で見かけて、不思議な歩き方をしていたので記憶に残っていた学生だった。二年越しの謎は解けた。彼女は骨盤を後傾させたまま、つまり腰を抜いた姿勢で授業に臨んでいたのだった。

私の知る限り、これはとても珍しいケース。若手は、膝が笑っていても、肩が落ちていても、無理矢理腰を入れて強引に背筋を伸ばそうとしていることが多い。実際にやってみるととても不自然で窮屈な姿勢だが、攻め手なしでも引き下がれない決死の覚悟の現れなのだろうから仕方ない。そんな姿勢を何とかしたいと思ったことも、ワークショップの準備体操である「天突き発声」考案の動機の一つだったりする。

それが、むしろ腰つきを肩や膝に合わせてしまったかのような抜いた姿勢。意図してのことではなかろう。よいことなのか悪いことなのかもわからない。しかし、私は人の話を聞

くとき、腰を抜いて背中を丸めていることが多い。聞く話が深刻であればあるほどそうする。聞く姿勢で話す、不思議な授業。

授業はその姿勢にふさわしく、鈍刀のよう人を斬るとき不思議な「切れ味」を見せた。どんな不規則発言も受け止めて、「みんな合ってます」などと肯定的に応答して、なおかつ個別の発言に深入りしない、温かくも手堅いものだった。発言が予定外の方に流れてしまった時など、「もう一度質問を言い直します」とみずからリセットしてみせる、「時間を割って使う」技まで披露してくれた。

それは、目標に向かってゆっくり一歩ずつ進んでいるからこそ、群がる子供たち一人一人と握手してもペースもコースも乱れない、そんな歩き方を思わせた。人はとかく、自信がない時ほど、不測の事態が起こる前に目的地にたどり着いてしまおうと焦るものだ。しかしそんな焦った時ほど不測の事態には対処できない。ゆっくり歩けば、不測の事態にもぶれなくてすむ。

いや、本当は、まだそんな一般論として断言してしまっただけなのではないのか。しかし迂闊にも断言したくなる、感動的な姿であった。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.06.23 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.06.15

骨トレで命拾い？

いつになくけだるい一日、雨で足元が悪かったせいか、疲れてぼーっとしていたせいか、階段の最上段を踏み外した。

あっと思うまもなく、体幹部がいつも電車やバスの中で練習しているとおり動いて、姿勢を立て直すことができた。

何でも稽古しておくものだ。とはいえ、本当は階段なんか踏みはずなさいのが一番なのだが。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.06.15 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.05.31

ひなちゃんきんちょう

かつて私の仲間内では、「行進の時に同側の手足を上げてしまうさま」を「ひなちゃんきんちょう」と呼んでいた。「幼稚園の友達のひなちゃんが、緊張するとそういう歩き方になったから、ひなちゃんの歩き方を"ひなちゃんきんちょう"と呼ぶようになった」と、仲間の一人が言っていたためだ。今にして思えば、それは「ナンバ」の一種なのだが、「ナンバ」という言葉自体まだ知らなかった二十年前のことだ。

学生の前でわざと「ひなちゃんきんちょう」をやってみせることがある。近代化と教育、特に学校体育の関係を解説するとき、「近代軍にふさわしい身のこなし」に関連して、「人間は放っておいたら行進ができない」ことを具体的に示すためだ。

しかし今回、まったく異なる文脈で、「ひなちゃんきんちょう」をやってしまった。「職業や身分で大きく異なっていた身のこなしを超えて、近代軍が国民共通の身のこなしを生み出した」という話をしていたときだ。「こんなふうに一糸乱れず行進する」と言いながらその場足踏みを始めたら、正確に同側の手足が上がっていた。

ナンバで走れる身体というのは、行進ができない身体なのか。単に私が不器用なのか。いずれにしても、気がつけばもう何年も、「腕を振って足を上げて1、2、1、2」と歩いていない。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.05.31 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.05.29

## ダンスダンスダンス

学生によるストリートダンスの公演を観る機会に恵まれた。

黒山の人だかり。傾斜面につけられた階段の欄干の上に立って見ている人もいる。転落したら数メートル下のコンクリに激突だ。あんたら、頭蓋骨がコンクリに当たって割れる音、聞いたことないだろ。自分の頭蓋骨がああ音立てると思ったら、そんなところに立てるわけがない。一生聞かずにすませるに越したことはない音だが、自分のが割れたので一生聞かずじまい、なんてのはいただけない。

閑話休題。

路上公演はコンクリの照り返しがきつくて疲労も激しいのだという。それだけでなく、おそらく空間が開放的であるために、観客に同じ印象を与えるには屋内よりも高い技量と気力を要する。つまり「神様の降臨」をあてにしにくい。演者の気配は上空や観客の背後に抜けてしまうし、観客はその気になればよそ見し放題。路上で喝采を浴びられるようになれば、これは相当な手練れと考えるべきだろう。

十数人ずついくつものグループに分かれて踊るのだが、どのグループにも一人か二人、見事な「関節使い」がいる。肩胛骨の内側、背骨近くまでを肩として使い、骨盤全体を脚として使っている。例外なく女性。キャリアの違いもあるのだろう。幼少期からダンスを習っている男性は女性ほど多くはないはずだ。しかしそれだけとは思えない。新人の踊りは男女とも同じようにぎこちないからだ。

おそらく女性は、かなり早い時期に、筋肉に頼ることをやめて「骨使い」で踊ることを半ば無自覚に覚えるのだろう。男性より少ない筋肉で、男性と一緒にアップテンポの曲にあわせて踊るためには必然的な工夫だ。

一方男性は、特に二十代前半ともなれば、体力はピークだし筋力は鍛えた分だけ向上するように思えるし、おそらくはそんな事情で骨を意識せず筋肉だけで踊ってしまうのだ。その代わり、体は大きいし人数は少ないし、男性は男性であるだけで目立ってしまい、その体幹部の関節たちが活用されていないことが丸ばれになってしまっていたりするのだが。西洋人に混じって踊るとか、年をとって身体が筋肉に頼れなくなるとか、そういったきっかけでもないと、男性が筋肉の限界に気づくのは難しいのかもしれない。

柔道の嘉納治五郎翁や合気道の植芝盛平翁など、武道の開祖が小柄な人物であったというのは偶然ではなく必然的なことであったのだろうと、21世紀の若者たちを見ながら妙にリアルに感じてしまったりもする。

ところで、路上公演といえばギリヤーク尼ヶ崎。「予告路上ライブ」を一度、ライブハウスでの公演を一度拝見したただけだが、「食える路上ダンサー」の凄味を感じた。

七〇歳を優に越えた現在も、大須大道町人祭には欠かさず出演されているという。今年は10月14～16日。日本の全ストリートダンサー、要チェックである。

ダンスの系は何だと問われれば、とりあえずじょんがら系。でも食わず嫌いをおこさずに、ヒップホッパーもラッパーも、もちろんシャンソン歌手も是非。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.05.29 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.05.17

## 甲野善紀氏に会った

甲野善紀氏に会った。

出張の帰途、バスを待っていると通りかかる和服の御仁。黒がすりの長羽織に茶の袴。

こちらに向かって来る。洒落たお人だ。

しばらくして御仁の方へ再度目をやる。朴歯と思しき高下駄。そういえば、一本歯の下駄がはやっているらしい。え、一本歯？ まさかと思って御仁の足元を確認する。一本歯ではない。その代わり、御仁確かに刀と思しき包みを携えている。初めて顔を見る。間違いない、甲野善紀氏である。

思わず駆け寄って声をかける。かけてから気づく。今は「休養期間」と宣言していること。にもかかわらず超多忙であること。見ず知らずの者に路上で声かけられて迷惑じゃないだろうか。昔なら絶対にこんなことしなかったのに。日頃の「唐突に始める」レッスンがこんなところに効いてしまった。しかたなく継いだ二の句が「お忙しい御様子で。おからだくれぐれも大切に」って、三平じゃあるまいし。どうもすいません。

幸い気さくな人で、バス待ちの間、バスの車内と、問わず語りにいろいろ話してくれた。現代の物理学は、自分の動きを「不思議としか言いようがない」としか言えないくらい隙だらけのものであること、「昔は手を振らずに歩いていた」と保健体育の教科書に載るほどに時代が動いてきたということ、今朝出席した集まりのこと、合気道でも相手に手でふれていながら自分の全身を受け止めさせてしまうような位置どりをすることが可能であること、等々。身のこなしを工夫することと、そのことを通じて現代社会の閉塞状況を何とかしようとするにかけた並々な情熱を間近に感じた。

それより何より驚いたのは、氏が15分ほどバスに乗っている間、一度しかよろけなかったこと。今の私は、『動く骨 動きが劇的に変わる体幹内操法（栢野 忠夫）』を参考に、乗り物の揺れを体幹部で吸収しようと意識的に動いている。従ってバスがいつ揺れたかに敏感である。バスが揺れるたびに大げさに身をくねらせながら甲野氏の立ち姿を盗み見る。微動だにしない。「シベリア超特急」か？ いや、おそらくは、体内の小さな骨小さな関節のレベルで揺れを吸収してしまっているに相違ない。念のために再度指摘しておくが、足元は高下駄である。

高下駄を履いてさえ私と変わらぬ背丈。おそらく身長は160センチそこそこのはず。それが屈強な大男を手玉にとるとなれば、これは確かに「不思議」とか「奇跡」とか言われるのも無理はない。同じことを口さがない人なら「いんちき」と言うのだろう。

思いがけぬ眼福であった。

甲野さん、本日はありがとうございました。お身体くれぐれも大切に。ご活躍を祈っております。

バスの窓から指さしてあそこだと教えてくれた、氏の道場「松聲館」のサイトはこちら。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.05.17 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.05.10

## アイダアイダ

放送時間帯が変わり、5分長くなり、しかもその5分をアリモノでうめるようになってから、時計代わりにさえ見ることの減っていたNHK教育テレビの「からだであそぼ」。その「アリモノ」の一つであるダンス「アイダアイダ」を、わけあって繰り返し見ると、これが意外によくできている。

ボックスステップなどダンスの定番の動作はもちろん、前後左右へのステップや、腕を上下、前後、左右に動かす動作など、身体を立体的に動かせるように振り付けされている。

しかも動きが適度に、いや、過剰なほど遅い。幼児が真似てみるにしても遅い。実はこの遅さが重要なのではないか。動作というものは速くて雑より遅くて正確な方が、あとあと使いこなしやすいものだ。

さらに、関節（特に肘関節）を伸ばしすぎないのも脱ラジオ体操的。ブンブン腕を振り回して関節を傷めたりすることがない。

その上、二人組の動作まで含まれている。相手の動きを感じ取らないと成功しない、お

互いに体重を預けてバランスをとるような動き。

「アイーダアイダ」、タイトルは間抜けだが侮り難し。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.05.10 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.05.09

アイ～ン

「我々の観察力、記憶力はいかに曖昧か」の事例として、ご存じ志村けんの「アイ～ン」を使ってみた。

片っ端から、可能な限り正確に「アイ～ン」を模倣させ、ある一つの観点から「合否」を判定してゆく。その観点が何なのかあててください、というもの。

本筋とは離れたところで興味深かったこと2点。

(1)ヒジを過剰に高い位置に構える学生多数。アップの画面に映り込む腕の大きさを、何とか再現しようとしたものらしい。その意気やよし。でも、ヒジを持ち上げても正面から見た腕のボリュームは変わらない。

レシピを見ずに料理を作らせるバラエティ番組で、間違った調味料を使ってしまう場面は、色に執着した場合であることが多い。「赤いからタバスコ」とか「黒くするためにイカスミ入れてみよう」とか。決して似た現象ではないのだが、なぜかそのことを思い出した。

(2)正確なく(若い頃の志村が「全員集合」の舞台でやっていた、今でも映像が残っているもの、という意味での)アイ～ンを私が再現すると、ヒジを曲げながら肩胛骨を前に回し、さらに膝をゆるめて上体を若干沈ませながら腰を前方に水平移動させる。つまり手首は四つの軸(肘、肩、膝、腰)を持つ複雑な運動をする。

「手首をつかんだ手をふりほどく」という護身術をテレビで見て、我々にとっては「片手取り四方投げ裏」なのだが、子供に教える時のためにこんなフレーズを考えた」

「一步踏み込んで、ターン、アイ～ン」

正確なアイ～ンを再現すれば、軸が複雑すぎて、手首をつかみ続けていることはほぼ不可能だろうとあらためて思った。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.05.09 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)

2005.04.21

おい、N K

時計代わりにつけていた、NHK教育テレビ。「シュール」な番組を作っていた(らしい。妻から聞いた話である)「ピタゴラスイッチ」で、いきなりこんな歌が始まった。

右足出したら左手でででしょ

右手右足いっしょに出したらなんだか変でしょ

どうすりゃいいかは手足が知ってる

おいおい。

これだけ「ナンバ歩き」への注目が集まっている時代、NHK自身、斉藤孝や甲野善紀を登用した番組を作っている現在、「近代的な歩行動作は人体の本能的な動き」という歌を流しますか？

確かに、どうすりゃいいかは手足が知ってます。番組スタッフのみなさん、富士登山とか



二人三脚とかやっごらん。右手と右足、一緒にでるから。それが自然だから。

投稿者 山田雅彦 日時 2005.04.21 | 固定リンク | コメント (0) | トラックバック (0)